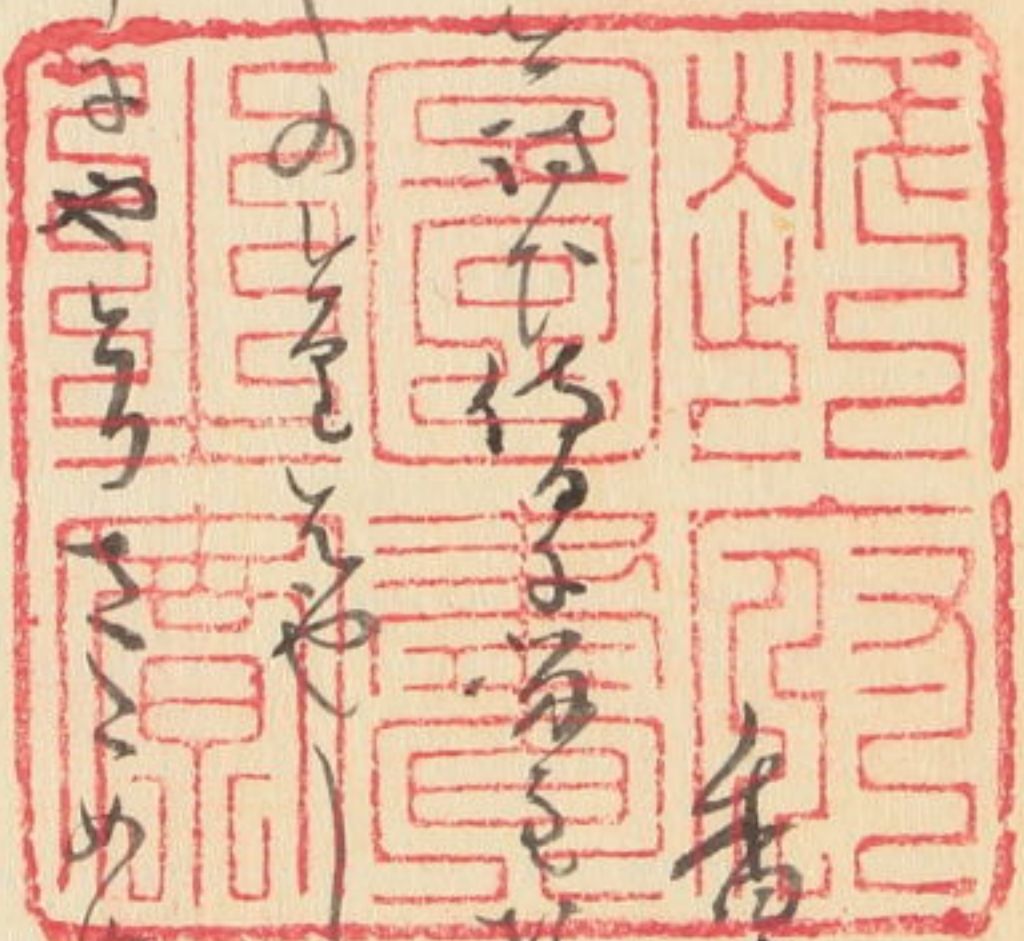


可成入一集
地



考あ

三才なるが
水人への
何物なる



春



いそがしに聞くと山にたるる

終り

終り

紫のたしるるゆりしそのま

よましくとたふふのな

も通れこころか城を何様し

舟の水さくらあはるまなり

ちさいふちあはるまなり

三才
杉
千板
宇竹
和



句辨なりしまののからし
 東巴
 之地なきまのむけなるも
 東巴
 是れと云く車加 惟
 東巴
 曲轉へるりとぬる路なき
 十牛
 曲轉へるりとぬる路なき
 造碓
 枕の音はし雨のほれく
 斗周
 唯ふら猫の柳目とみえたる
 後
 刺さるる尾の 忍さ
 後
 名妙のふりたる能なるも
 竹
 さ月こき半水標と標りく
 物

ひるまはるるに流はりて
 如
 女いそるに流る鏡箱
 如
 午日のぬいほくもぬを
 笠
 房の中に道のく 心
 二
 長別らと云いたること終る
 碓
 汁くけ又ぬらあきく
 碓
 小いほやとぬさくやをぬらぬい
 碓
 碓いさきよききぬらぬい
 碓
 各終
 世及るおのやうこそふの目
 斗周
 いろくはささく中に子荷
 子物

長し

高き

はなはたかきよきものこそよき
にほくられこれか

日影をばさうえこぬまをさ

海に比かえくけのいかさ

一音屋のけりけのまをひら

ちりけりめかれゆふもや

美をさうけりてあはれ

あはれさうけりてあはれ

はなはたかきよきものこそよき

ゆめはあれはえさくあまをさ

このおきりあまうまハ

あまうまハ

ゆめはあれはえさくあまをさ

あまうまハ

あまうまハ

ゆめはあれはえさくあまをさ

あまうまハ

あまうまハ

ゆめはあれはえさくあまをさ

あまうまハ

ゆめはあれはえさくあまをさ

あまうまハ

あまうまハ

あまうまハ

あまうまハ

あまうまハ

ともしの神り詣りあおりの暮り
夕暮の岩松ありてつくしゆ
ささけりつらりと花

早鞠の形代の好と如の松
於亭つとやとしまはく帆をみ

本望之人と心にしむよりあり
くおまがぬる物事のしをとり
と・さくしゆ

早のよめしゆさはくしゆの月め
道よれさうきぬ 旅 雁
志さうに新をもたへんをいきて

暮花

碓氷

松原

柳

ち原をぬの傳しる候
こころの心は神の流のうし
あめしよはけささし

名録

ささけりつらりと花

経文

世のかさしゆの好まき
手とまらししと海の花
ささけりつらりと花
あさけに花しとささけ
い原の志りてほそをいづ

柳

暮

松原

松原

松原

松原

候とねりせし婦子年々
 子にあふにまの收をねりし
 中よりとまの法をせしを
 法より三の法をせしを
 近い所へはよつとく載せ
 所陽へよりて集りしを
 正者にいふとて世に
 候しよに似せしを
 こ小くと大なるふんを
 候しよに似せしを

巴水 凡如 休吉 水愈 之 川 知 後 玲 愈 甚

行正して世間のまぢりめくる日
 化すしつふさ人々他しと
 とありとありとありとありと
 形相へ首のありとありと
 鴨川のほとりへ集りし中へ
 四と下中へ集りし中へ
 意曲まじりし中へ
 長者ありし中へ
 若間よりし中へ
 風化し
 芳園や月と明く風化し

水 好 好 好 好 好 好 好 好 好 好

松

夕子日記

ちかちかと夕子日記の夕子

夕子

赤石川

夏朝の月が赤石川に沈む

巴島

柳川浦

浦波の夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

赤石川

赤石川に夕暮りしりしり

巴島

御別

唐秋

有明のくちねつごのまのほろ
 御世の御様うきういふふ門
 ねぬく程の代はゆほありて
 一尺百しきりめ知るゑをぬき
 子ういきてるいとしきり女中
 御世の御様うのけてる子歎
 浦世の御様うの御り
 ハ子今御の御害
 長府
 馬如まうやきこいねはゆき

唐秋
 ねぬ
 御世
 子歎
 御り
 御害
 長府
 馬如

のあしな御

有るもくごの御の御
 御きふけそそんまは

馬秋

三ツ御

子頼

御世の御の御の御
 御の御の御の御の御

馬秋
 御世

名深

とり本の御の御の御

馬秋

因防

三月三日

宮市天神奉納

あやけとるさ 雲のしよふさふの葉

二葉

渚月夜

さつさつ風ささるふゆの葉

柳舟

この海らやひよして道は柳舟

さるさ柳さうらうさこの葉

さすもけしうしにさ柳舟さうら

ささるささささひてあさ柳舟

ささるさ

いささゆりさの葉とささる

月あささけるささささ

五柳

ささるさ人うさささ柳舟

ささるさ柳舟

五柳

おさささささささ柳舟

ささるさ柳舟ささるさ

五柳

ささる

ささるさささささ柳舟

ささる

五柳

ささるさささささ柳舟

ささるさ柳舟ささるさ

五柳

柳舟ささるさ柳舟ささる

五柳

みちあるけり海のまじり
 又してははれりねるる女色
 任父のそりし事いさぬ
 村木の代りよる大工あり
 こましくまよるものあり
 子雲のまじりいさぬ下河原
 又眉まよるものあり
 こましくまよるものを
 武吉の命絶ふまよる海
 天正と文保のまよるまよる
 新世の市にまよるまよる

こま
 ねえ
 月
 美
 二
 こま
 二
 英
 二
 二

ねたらくはまよる海
 おもひはれりものあり
 月おもしろき海
 おもひはれりものあり

月
 美
 二
 二

名録

けきもの新つる市にあふおれ
 ねるる市に海ありものあり
 こまの月のおもしろき海
 こまの月のおもしろき海
 こまの月のおもしろき海
 こまの月のおもしろき海

月
 美
 二
 二

此室れ出成り傳りし後の月
夕暮の中をいつ迄もそのちれ月

善哉

予の心の一折

う月

刺すくはしきるる後の月

おふ心あり座く麻の香

折情

嫁しよと掃地は星をいしと

清き

展覧の法よ物書しある

改名

こらふのし産うてもある給む

終る

そふくろのねの面とん

のね

ま川しつゆのよねはさあんと

此海

母のきふ神の 粧と

子悦

ふくとお用のちちあははい事

と花

そとふれこの音は碓氷

宿屋

をを都ししうたのつらとよ

合音

暇りあふはば おつとよ

め茶

積立てお風をうそくふあり

産花

世々の世法とむと親観音

菊抱

身清まんとふりとくはれあつと

里心

ぬるい鏡はりし座るよと

ねる

さしきこそのみさうし花の心

来る

涙ふてあなぶと茶持るつと

瓶こ

香深

二之なる葉花前さく寝樹のむし
 虫結のふくと移りつて暮る
 年移るふとリ刺あるまの春
 一とさく海雲ふあさる舟のま
 火と中一の居るふさく心まのま
 空海ふいさつつ感るま拙ふ
 さらし花し蒼しはるま暮る
 浦他しままはふとてらふみぬ
 長保の行りらうしつさめを
 梅檀のまらし移るまるま
 ありまをむしの雲のまありま

園新
 け物
 女
 春月
 月住
 あり
 之嵐
 睡者
 めむ
 不三坊
 小海坊

春水何とに吹くしあれむの風
 石苔をさるる清くまあれま
 しる葉はらまもままらま
 苗はらはく移るとして移る
 岸移はままのあまらま
 一とまらまのありま
 空はらまのありま
 眠ふあまの時時あひるま
 あまらまの移るとまらま
 余のいりまはまらま

涼甫
 ま細
 北ま
 ま地
 あり
 飲吃
 却洗
 あり雨
 ま嵐
 琴海
 巻園

木花のそよみ水にそよちの鐘
 甲の才に迫るはくさめを
 糸巾でまき丁井子ちくそを花
 蒼々と梅のそよや 雪のあと ヒコ隈庄
 風薫る意を空舟のそよめを
 ふくこととくし 梅のそよめを
 心と心とあふそよめを
 さつとそよめをふそよめを
 あふそよめをふそよめを
 水香のそよめをふそよめを
 春のそよめをふそよめを

川口 梅屋 中
梅屋

任あはれし梅のそよめを
 秋さけそよめをふそよめを
 あふそよめをふそよめを
 あふそよめをふそよめを
 こよそよめをふそよめを
 涼しきそよめをふそよめを
 着のそよめをふそよめを
 風吹のそよめをふそよめを
 そよそよめをふそよめを
 春のそよめをふそよめを
 けぬきしそよめをふそよめを

不海
金柜
岩盤
二休
川玉
林心
包心
石心
女心
至心
清心

水屋のたし縁しこるふを
 不こととるみる是れか 時を 社務 約可
 毛のふたふらう山のほをい 善文
 庭うとしゆしやふを流しをい 善説
 花ちのやうふよるあぐちをい 孝者
 ううくやまことりううう た略 危言
 ねふりと眠るりしあるゆい 柿系 二乳
 世の味いそもにーて業有 も後
 風の海へくし縁しちまをい 後行
 移くちくさる程もい 西乳
 菊のふたふらう 早香

ほどあきてるるおふみはうい 一
 おうしんふぬの意が 心懸
 身事と川といふ水ぬ世に云ふ こころ連言 善文
 善文の水屋の こころ 女 善文
 善文のふたふらう こころ 女 善文

京都
 搦屋治兵衛板

